

## 統計の眼

## 日本の畜産業の構造

畜産業は人間にとって有用な物質(食肉・乳・衣料原料等)を得るために動物を繁殖・飼育させることであり、海に囲まれた日本では伝統的に蛋白質の多くを魚から得ていたため、かつては畜産はあまり盛んではなかった。

しかし、食生活の洋風化に伴って畜産業は戦後急成長し、一九六〇年から九七年までの三十七年間に、生産量は、牛乳四・五倍、牛肉三・八倍、豚肉八・六倍、鶏卵五・九倍、鶏肉一一・九倍に増大した。飼育頭羽数もそれぞれ増大し、現在採卵鶏は人口の一・五倍、ブロイラーも人口の九割程度の数を飼育している。日本人はほぼ毎日人一個の卵を食べているため、人口を上回る採卵鶏を飼育しているのである。

この間、経営体数が減少する一方で経営規模が急拡大し、かつてのように農家の庭先で数頭(数羽)飼っている状態から、専業の大規模経営が生産の大部分を担っている構造になった。特にこの傾向は豚、採卵鶏、ブロイラーで顕著であり、生産量にしろ法人経営の割合はそれぞれ五〇・三%、七二・四%、四九・五%(九五五年)に達している。生産地域の集積も進み、上位五県の割合(飼育数)は、乳用牛六〇%、肉用牛四四%、豚三九%、ブロイラー五五%と四〜六割に達している。ただし、鶏卵は長距離輸送が困難で鮮度が重視されるため、採卵鶏につ

いてはさほど地域特化は進んでいない。

一方で輸入も急増し、その結果自給率が低下した。特に牛肉の自給率は三六%まで低下するに至った。輸送技術・冷蔵技術の発達により海外から品質を保持したまま輸入することが可能になり、円高の進行と輸入自由化が輸入増大に拍車をかけた。なお、畜産は耕種農業(米麦、野菜・果実)と比べて加工工程が大きな役割を果たしており(乳製品、ハム等)、畜産の生産構造を検討する上で重要なのは、こうした加工部門の多くが大規模な寡占企業に担われていることである。(清水)

| 項 目                  | 年  | 乳用牛   | 肉用牛   | 豚     | 採卵鶏    | ブロイラー  |
|----------------------|----|-------|-------|-------|--------|--------|
| 飼 育 数 (千頭、万羽)        | 60 | 824   | 2,340 | 1,918 | 5,463  | —      |
|                      | 97 | 1,897 | 2,852 | 9,809 | 19,304 | 11,347 |
| 1 戸 当 たり 頭 羽 数       | 60 | 2.0   | 1.2   | 2.4   | 14     | —      |
|                      | 97 | 48.3  | 20.0  | 681.2 | 27,498 | 31,864 |
| 上位 5 県 頭 羽 数 シェア (%) | 60 | 42    | 23    | 30    | 24     | —      |
|                      | 97 | 60    | 44    | 39    | 27     | 55     |
| 生 産 量 (千トン)          | 60 | 1,939 | 141   | 149   | 696    | 103    |
|                      | 97 | 8,630 | 529   | 1,288 | 2,570  | 1,228  |
| 輸 入 量 (千トン)          | 60 | 237   | 6     | 6     | 0      | 0      |
|                      | 97 | 3,498 | 941   | 755   | 104    | 588    |
| 自 給 率 (%)            | 60 | 89    | 96    | 96    | 101    | 100    |
|                      | 97 | 71    | 36    | 62    | 96     | 67     |

(注)・生産量、輸入量、自給率は「食料自給表」、他は「畜産統計」。

・1960年の肉用牛は役牛を含む。